イエスは主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　156号

「み言葉に聴き従う」

使徒言行録　10章33節

矢野　伸雄

アシュラムに参加して今年で12年になります。今、ここで、この私に、直接語られていることとして、聖書のみ言葉に聴き、これに従うということを救えられました。

毎朝15分間、神様と二人きりになって、聖書を読み、祈る時を過ごす。このことを通して神様のみ心が迫ってくることを体験します。しかし、これを実行しますと、大変難しいことが分ります。でもこれを習慣として守り続けた時、私達の信仰が神様を中心としたものに変えられる思いがします。そして、私達の中に働くのは神の言葉であることに気付きます。

私の尊敬する或る牧師は次のように語っています。「聖書を読むということは私達の主体的な行為です。（中略）しかし、聞くことには語り手があり、語り手に主体があります。語り手は私に聴くことを求めます。語り手の言葉を受け入れるのでなければ、聴いたことになりません。そして、語り手は応答を求めます。応答する時、語られた言葉は出来事となります。

私達が『聖書のみ言葉を、神の言葉として聴く』ということはそういうことなのです」私は全く同感です。しかし、どんなにみ言葉を聞いていてもそれを聴きっぱなしでいるのでは、生命の言葉になりません。賛美歌501番に「生命のみ言葉　妙にくすし、見えざる御神の旨を示し、仕えまつる道を救う」とあります。そのみ言葉をまともに聴いて、命がけで従って行こうとする。そこで、そのみ言葉が、生命のみ言葉になるものと信じます。

私は、聖書のみ言葉を「神の言葉」として聴く姿勢を、与えられたみ言葉から示されます。ヤッファからペトロを招いて、百人隊長コルネリオは言います。

「今わたしたちは皆、主があなたにお命じになったことを残らず聞こうとして、神の前にいるのです。ペトロの言葉を「神の言葉」として聞こうとして、「神の前にいるのです」と言っています。ひれ伏し、身を投げ出す姿勢を見ます。その時、み言葉は私達の中に生きて働きます。

聖書は神の言葉です。神の言葉は、聴いて従うことを求めています。聴き従ったその時、主が働いていて下さいます。感謝しないではいられません。

（日本バプテスト同盟　横浜南キリスト教会　牧師）

霊想

『主イエスの肉を食べる』ヨハネ6の53～54

大阪住吉教会牧師　脇田　眞一

主イエスは、ヨハネ福音書六章五三～五四節で「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」と言われました。

「人の子の肉を食べ、その血を飲む」とは、「イエス様が十字架上で裂かれた肉、流された血」について言われており、「人の子の肉を食べ、その血を飲む」とは、信仰によって、「霊なるキリストと信徒とが真の交わりに入ること」を指しています。更に申しますと、「キリストの肉」とは「キリストの聖言」であります。「肉を食べる」とは「聖言に聞き従う」ということです。

ヨハネ六章五五節「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物である」とあり、ここには「まことの食べ物」「まことの飲み物」とありますが、これは一体どういう食べ物や飲み物でしょうか。それは「永遠の命を与える食物」や「永遠の命を与える飲み物」を意味しています。従って、イエス様の肉や血は永遠の命を与えるものであります。ヨハネ六章五六節には「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる」とあり、この意味はイエス様の聖言に聞き従う人と一緒にいて下さるという事であり、イエス様と聖言に従う人とが親密な関係になり、両者が一致している状態になるということです。

イエス様はヨハネ六章六三節「わたしがあなたに話した言葉は霊であり、命である」といわれました。聖言は霊であり、命なのです。聖言は首から上の頭で理解したり、頭で味わう程度のものではないのです。聖言を食べる時には、首から下の体全体を使うのです。食べ物を喉に通し、お腹にまでいれるのです。聖言を食べる時には、苦痛や痛みを伴うこともあります。犠牲を伴うこともあります。神の聖言なるが故に、損をしても得をしても、結果がどのようになろうとも、断じて聞き従い、行動し、実行するのです。その時、素晴らしい完全な解決が与えられ、「神様、あなたは生きておられます」と言わざる得ないことを実感することがあります。そして信仰を一段と深く成長させて頂けるのです。このような聖言を食べることを繰り返している間に、私達は真の信仰が成長し、清められ、聖化されていくのです。

またマタイ二六章三九節には「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」とのイエス様のゲッセマネの祈りがあります。重大な事件が起こった際、私達は神の前に祈り祈って心が打ち砕かれ、ゲッセマネの祈りをわが祈りとして祈り、神の聖言に聞き従うかどうか、それが真実のキリスト者かどうかの別れ道になります。「わが意をなさんとにあらで、御心をなさせまえ」との決断をもって進み行く時、夢想だにしないことが起こり、そのことを見て、神様は生きておられると、言わずにはおられず、腹の底から熱いものを感じて、神様に感謝の祈りをせずにおれない体験をさせて戴く。このような体験を幾度もさせていただき、信仰を成長させて戴く。これが真のクリスチャン生活でありましょう。そして日毎の生活において、聖言を食べ続けていると、ペトロⅠ一章八～九節「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです」とあるように、この聖言通りの喜びに満ちあふれた生活を体験させて戴くという恵みにもあずからせて戴けるのです。

立証

『アシュラムに関わって感謝』

永田　直子

「あなたは、わたしの内臓を造り、母の胎内にわたしを組み立ててくださった。わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは恐ろしい力によって驚くべきものに造り上げられている。

御業がどんなに驚くべきものかわたしの魂はよく知っている。（詩篇139・13―14）

寄稿の依頼を受けて、恐縮と共に恵みである。十数年の関わりの恵みに与りながら、当教会でのアシュラムの実践をもつことに至っていないニードを心底に抱いています。

アシュラムの五原則の中に「教会への奉仕について」導かれ、支えられて、婦人会連合・教会学校との関わりを不完全ながらも、主の導きにあるものと確信している。また、関東アシュラムと城北アシュラムの交わりに於いて、他教会の多くの兄弟姉妹にも熱いお祈りを頂いて、年齢を重ね生かされることを喜び祝うことは感謝に耐えません。

その証として、教会への奉仕。家族の救いのニードに増々、み力を頂き感謝です。

2000年の国際アシュラム（インドのサト・タル）でのアシュラム集会の状況を2004年の日本アシュラム五十周年記念（飯島庸江、飯島延浩、日本語訳）小冊子として出版された賜う今の時また新たな思いで紐解き、胸躍らせられています。

「アシュラムは愛による身体と精神と霊の癒し」または「神と過ごす休暇」とも定義づけられているとの高祖〝スタンレー・ジョーンズ〟のお言葉が与えられています。

「クリスチャンはキリストを通して、神と人と永遠の命を信ずる人々です」と語られ、また、アシュラムの導入としての数年を頂くことの恵みの実は障壁を取り除くことで神の国は人種・階級の差のない社会であり、肩書きのある人とない人との間の障壁もないと。

イエス様が「あなたがたの父はただ一人でお互いは兄弟姉妹である」といわれているので「ブラザー」「シスター」ということばを使い教派、年令の障壁も取り除いて交わりがなされます。

最も重大な障壁は私たちの魂の内側にあり、恐怖、反感、罪意識、劣等感だと教えられています。

神と人との間のこれらの障壁を取り除くように、心身ともにきよめられ、実行を伴うよう、主に願い求めて、祈り合うことを示され、肝に銘じ、み救いを感謝しつつ、深く、広く、味わって歩み進む人生であるよう祈らせられます。「イエスは主である」「イエスは実によみがえられた」と右手の三指を上げて声高く導き交わし、心一つに導かれますよう。み国のひな型を聖霊で満ちるものとならせてくださいと祈りは深められます。先達の方々、主にある兄弟姉妹の方々にどうかこの恵みが聖霊によって豊かに注がれ、充満に至りますように。

主よ、お導きを切に祈ります。

第10回 国際アシュラム回想記

横山　義孝

第10回国際アシュラム参加者

アシュラム発生の地、インド・サト・タルを一度訪れたいとの夢が筆者の内にありました。それはスタンレージョーンズ師による一九六〇年開催の日本クリスチャン・アシュラム（於御殿場・東山荘）に参加したことによって私の魂に生涯記録されるべき聖霊充満の恵みを頂いたからです。主の御詳しの時が到来しました。二〇〇〇年十一月第10回国際クリスチャンアシュラムがサト・タルに於いて開催されることになったのです。

そもそも国際アシュラムは一九七〇年代から、Sジョーンズ師の提唱によってイスラエルガリラヤ湖畔で開催されてから3～4年毎に世界の各地で開催されて来ました。Gジョーンズ亡き後は女婿のJ・マシューズ師が中心になって継続して来たのです。

今回の開催は00年11月18日（土）～21日（火）で、日本からの参加者は大石嗣郎、横山義孝、西海静雄、木部安来、飯島庸江（以上関東）土山牧羔（関西）若林節子（富山）岡山敦彦（九州）（敬称略）でした。インド開催となった理由には、この年インドアシュラム70周年記念の時でもあったからです。

私たち日本組は11月16日（木）12時に成田をたち、夕6時デリー空港でパークホテル泊。ここでアメリカ組（約40名）と初対面・翌朝8時30分米組と一緒に三台のバスに分乗して出発。

翌日夕5時アシュラムセンターのあるサト・タル（標高約千メートル七つの湖のある景勝地）着。現地クリスチャン達から、花のレイを掛けられて歓迎を受けました。

サト・タルのアシュラムセンターは中央にS・ジョーンズの記念館となる古い木造の建物、スタンレーの事務室兼書斎、隣に祈りの室、そ

れに続いてアシュラム参加者等の宿泊室。折り畳み式の古いベッドが並んでいました。敷地地構内には百人位収容の食堂兼会議室。坂を少し登った木立の中に最近新築したコンクリートの六角形の祈りの道場（礼拝堂）がありました。会衆席ははフロアーに薄い敷物に正座する形。

この礼拝堂を囲んで大小の宿泊棟がここに私たちも泊めてもらいました。センター全体に中型の発電機がありますが、電灯は主会場だけで、宿泊室はローソク使用、旧式の水洗トイレが大きい建物に一ヶ所、浴室なし、板のように堅い毛布二枚が夜具でした。私たちは、ここで生涯を献げたスタンレージョーンズ師の息吹を感じつつ四日間のアシュラムのプログラムに入ったのです。

インド・サト・タル アシュラムセンター

00'年11月18日（土）夕4時からプログラムは始まりました。登録、夕食の後7時30分より現地牧師ブラザーバーマ師とその協力者によって歓迎の集い。この第10回国際アシュラムに併せて、インドアシュラム70周年記念の挨拶。二人の姉妹の証、インド音楽の演奏のあと短い「開心の時」が持たれました。翌19（日）～21（火）までは聖日の礼拝を含め6時起床、6時45分静聴の時、7時30分朝食、9時聖書の学び、10時コーヒーの交わり、10時30分礼拝或宣教の時、12時昼食4時30分からグループによる分ち合い5時30分レークサイドで夕拝、7時夕食、8時各国の活動報告、9時30分晩祷、10時消灯といったプログラムでした。

第二日の聖日礼拝ではドロシーデイビズ姉のメッセージがあり、続いてスタンレードーンズ司祭によって聖餐式が待たれました。パンをそれぞれブドー酒で浸して頂くといった形のもので新鮮さを感じました。「開心の時」の交わりで立って発言するのに少し勇気を要しましたが、私は飯島庸江師の通訳によって国際アシュラム参加の喜びと、交わりの感謝を、短く述べ、「イエスは主である」（ジーザス、イズ、ロード）と大声で叫んで結びました。第二夜8時からの報告交わりの時に私たち日本組は大石嗣郎兄が日本クリスチャンアシュラムの報告を語り、翌日にはアメリカ並、インドの教会とアシュラム運動の報告を伺いメキシコから参加の兄弟による立証も聞くことが出来ました。和気藹々とした交わりは昼食或夕食の時でした。各国からの演出、パフォーマンスがり、日本からは飯島庸江姉が詩吟を披露、若林節子姉は尼僧からクリスチャンになっていますので、日本仏教のお経の踊りが披露されて拍手喝采をあびました。

サト・タル 現地牧師宅にて

総じて今回のアシュラムは延べ百人弱の参加でしたが、各国の参加者が「イエスは主である」とのみ言葉のもと、地上に神の国の成ることを願った。祈りと交わりの時であったと感謝し喜びました。帰途はスタンレーの宣教の拠点、ルクナウの教会を訪れる等観光の時も持ち、主の御名を崇めつつ帰国しました。

各地区アシュラム予告

●第28回横浜岡村アシュラム
と　き　'09年7月11日(土)～12(日)

●第47回関東アシュラム
と　き　'09年9月14日(月)～16日(水)
ところ　山崎製パン箱根山荘
助言者　杉田常夫師

●第43回関西アシュラム
と　き　'09年9月21(月)～22日(火)
ところ　三影母の家ベテル
テーマ　アシュラム五大原則

●第44回九州アシュラム
と　き　'09年9月21日(月)～22日(火)
ところ　宗像黙想の家
助言者　斉藤剛毅師

各地区アシュラムの上に祝福を祈りつつ（Y.）

〒一八一―〇〇一一　三鷹市井口3―15―6
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇―一―四五五八
理事長　大石嗣郎